日々の実践のためのワンポイント

第一回　密教的成就に至る七つの条件①
――礼拝・供養

ご修行がんばっていらっしゃいますか。

このコーナーでは、日々の真理の実践にすぐに役立つ真理のエッセンスを一つずつ取り上げて学んでいきます。今回と次回の二回にわたって取り上げるのは、「密教的成就に至る七つの条件(タントラの七つのプロセス)」です。

礼拝・供養・ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願・回向からなるこの七つのプロセスは、とかく現世的な幸福へ向かいがちになるわたしたちの心の働きや現象を止め、修行を成熟させる方向に持っていくための修行です。そして、真理の体現者でありわたしたちの導き手であるグルや真理との縁を強めるものでもあります。ですから、この修行法は六つの極限や七科三十七道品、四諦八正道と同等、あるいはそれ以上の力があるもので、密教の成就に必要な条件だといわれているのです。

それでは、七つの条件を一つずつ見ていきましょう。

1．礼拝
――高い世界の魂とのパイプづくり

まずね、あなた方が解脱するための第一の条件は礼拝だ。礼拝とは何かというと、あなた方がやっている立位礼拝、これを実際に礼拝する、あるいは瞑想すると。これが第一の通過点になる。(中略)礼拝によって、わたしは修行に対して向かう。わたしは修行するぞと。そこで、いろんな雑念が出てくるのは、それは自己のカルマであるから、苦しみが出てくるのは、それは自己のカルマであるから、それを乗り越えて一歩でも進もうという気持ちを持つ。これが礼拝の本当の意味だ。

(八八年十一月四日　直弟子用尊師説法)

礼拝は、帰依の心の表明です。帰依とは、いわば自分の向かおうとする方向を決め、その最終地点に至るためにどの乗り物に乗るかを決めること、そして礼拝は、「わたしはこの乗り物に乗ります」と宣言することにあたります。

わたしたちの目的は、無常を超えて絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜に至ること。そのためにわたしたちは真理の体現者でいらっしゃるグル・シヴァ大神・すべての真理勝者方や、真理の法則に帰依し、その帰依の実践として礼拝を行なうのです。

もし、帰依の実践が完璧にできるならば、それだけでもわたしたちは最終地点に至ることができると尊師はおっしゃっています。百パーセントの帰依ができていれば、最終地点に到達されているグル・シヴァ大神・真理勝者方の状態が、完全にわたしたちに与えられるからです。しかし、そのような状態に至ることは、けがれの多いわたしたちには不可能と言っていいほど難しいことです。

そこでいろいろな形態の修行が存在するのですが、その第一歩が、皆さんも実践されている立位礼拝や帰依マントラといった帰依の修行法なのです。

百パーセントの合一は難しいとはいえ、心を込めた礼拝によって、グルとわたしたちとの間にはパイプができ、カルマ交換が起きます。わたしたちの悪いカルマをグルが引き受けてくださり、代わりにグルに内在する解脱に至るデータを与えていただくことができるのです。

あなた方が立位礼拝、あるいはグル・ヨーガのマントラを唱えているとき、わたしは動けなくなる。(中略)どんどん、どんどん動けなくなってくる。結局は、エネルギーの移入が行なわれているわけだね、これは。逆にあなた方のステージ

はどんどん、どんどん上がってるはずだ。これが、タントラヤーナ・プロセスです。

（八八年一月三日　於・狂気の集中セミナー）

礼拝は、密教的成就に至る七つの条件の始まりであるだけではなく、すべての修行の基本なのです。立位礼拝、帰依マントラだけでなく、個人祭壇への日々の礼拝や道場へ出入りするときの三礼など、礼拝の機会をしっかりとらえ、心を込めた礼拝を行ないましょう。

2．供養

——高い世界の魂の祝福と守護を得る

そして、第二の通過点は何かと言ったら、第二の通過点は布施だ。これは、供養という言葉を使っているけどね。それは、例えば奉仕をするだとか、あるいは実際に物をね、奉仕をするだとか、これがグルに向いたとき、第二の通過点を過ぎたというふうに判断される。

（八八年十一月四日　於・富士山総本部道場）

密教的成就に至る七つの条件の二番目に挙げられるのは供養です。供養は物をささげるだけではなく、奉仕などの行為をささげることによっても行なうことができます。

ここで大切なのは、「何を供養するか」ではなく、「どのような対象に対して供養するか」「どのような心で供養するか」ということであるのは言うまでもありません。なぜなら、供養することによって、その対象と供養する者との間にカルマの交換が起こるからです。ですから、解脱・悟りを目指して修行するわたしたちの供養の対象は、当然、真理の体現者でいらっしゃるグル・シヴァ大神・すべての真理勝者方ということになります。

●供養の対象

そのためにオウムが真理であるかどうかが問題になってくると。つまり、こういうことですね。「わたしはこの人が好きだから」と言うと、その好きな人とつながります、それは無意識レベルで。そうすると、その世界へ入ってくるわけです。だから例えば、（中略）ここにオウムがあって、そのオウムがもし真理だとしたならば、それを一生懸命供養することによって、麻原のエネルギー、あるいはシヴァ神のエネルギーが流れます。そうするとその人は当然、無意識レベルの浄化を始めます。ところが、もしこれが真理でなければ、真理でないエネルギーが流れ込むわけです。ですから、布施をしたという——つまり物を捨てたという——執着のなさは身につくでしょう、どちらに布施をしても。ところが、流れ込んでくるエネルギーは全然別個のものになります。

（八七年十二月十三日　於・福岡ポア・セミナー）

●心から供養する

例えばここに如来がいる、あるいは菩薩がいる。これに対して、「ああ、みんなが布施してるから自分も布施しよう」とポッと行なったとしよう。これとだよ、心から、「わたしの今から供養するものを受け取ってほしいなあ」と考えることが、心を供養するということだ。だから、例えばワークも「与えられてるからやるか」って言ってやるんじゃなくて、「自分のこのワークが、例えばシヴァ神のためになりますように」とか、例えば、「グルのためになりますように」ということで行なえばそれは心の供養ということになる。

（八九年五月三日　直弟子用説法）

供養は物の供養や奉仕だけでなく、瞑想によって行なうこともできます。供養の瞑想は、わたしたちの貪りや執着を滅し、功徳を蓄えるために効果の高い修行法です。「グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション」、「小乗のツァンダリー」などの瞑想体系の中に、供養の瞑想が組み込まれていますので、伝授されている方は日々実践しましょう。

それ以外にも、例えば日々の食事を「食の供養」の瞑想とすることで、供養の瞑想の実践をすることもできますし、自分の執着しているものをグルに捧げる瞑想を行なうことによっても供養の瞑想を行なうことはできます。

●瞑想における供養

修行方法の中には、功徳を積む瞑想があります。例えばマンダラ供養など、その典型です。あるいは、「小乗のツァンダリー」において、マハーマーヤに変化（へんげ）したり、ホワイトターラーに変化したりして行なう瞑想もその典型です。しかし、その瞑想のときには、実際、対象に対して何かを供養しているわけではありません。それは心を使い、イメージを使い供養しているわけです。

それでもわたしたちは大きな功徳を積むことができるのです。

それはなぜでしょうか。先程も述べたとおり、功徳には第一の点と第二の点が必要です。そして第二の点、これが特に真理勝者や覚者、あるいは向煩悩滅尽多学男、向煩悩滅尽多学女、あるいは到達真智運命魂、あるいは帰依信男や帰依信女のように法を具足している人、これに対して供養した場合、それはちょうど鏡のように反射され、例えば心において功徳を積んだ場合、心にその反射が返り、そして心の浄化とつながるからなのです。

では、そうでない場合はどうしたらいいのかと。できるだけ自分のおいしいと思うもの、できるだけ自分の引っかかっているもの、これをひたすら供養する。供養することにより喜びを覚える。供養することにより喜びを覚えることにより、逆にその喜びの返ってくる

世界へと転生する種子を作る。つまり、戯忘天の世界です。

(九一年七月十四日　於・神奈川説法の祭典)

●食の供養

　ここで食、食事について検討してみよう。顕教においては当然、「食はできるだけ捨断されるべきものである」という検討をなされる。しかし、もしここに観想法に優れた者が存在するとするならば、その観想法に優れた者は当然、しっかりとグル、あるいはグルを中心とした三宝を観想することにより、逆に多くの供物を、しかも味覚を全く経験しないで口から胃袋に通過させ、それによって供養の瞑想の体系を確定することができる。もちろんこの場合の条件は、並外れた集中力と、それからもう一つは、味覚に対してのとらわれのない、という二つの条件がそろっていて初めて、この密教の供養法の瞑想が達成できるはずである。逆に集中力がなく、そして観想する力がない、味覚にとらわれた者が、供養だといっていかにたくさんの供物を口から胃袋に通過させたとしても、それは供養でも何でもなく、ただ単に味覚を修習し、自己の低級霊域の貪りの煩悩を増大させているにすぎないということになる。

(九二年八月十六日　於・第二サティアン)

●とらわれた味を供養する

　「うまいうまい」というので供養するんでしょ。つまり、どういうことかというと、例えばね、お布施という考え方があると。自分の最も価値のあるものを布施することが、布施の功徳じゃないかな。ということは、そのうまいものを、例えば喉にグルとシヴァ大神を観想しておいて、「自分が、これは、おいしいと思っているものです。どうぞお受けください」と、いう心を持って供養したならばそれは功徳になるだろうか、悪業になるだろうかと。

(中略)

　その味に対してとらわれて、そのとらわれた味を供養するんです。これは最もおいしいものであるから、それを供養いたしますと。

(九一年二月十六日　於・札幌支部)

　食だけでなく、身・口・意の働き一つ一つを真理の法則にかなったものとし、供養の心を持って行なうならば、わたしたちの生活すべてを供養とすることも可能なのです。供養の極限は、自分の持つ最も大切なもの、すなわち身の供養なのですが、その実践のためには、前段階として、財施・安心施・真理施といった基本的な布施や日々の身・口・意の供養の徹底が完全に行なわれることが必要であることは、いうまでもありません。

　供養を行なうことによって、対象となる魂とのカルマ交換が起こ

りますが、供養の効果はそれだけではなく、高い世界の魂を供養することによって、その対象からの祝福や守護が得られるということにもあります。グルやシヴァ大神、すべての真理勝者方の祝福・加護なしに修行は進みませんから、供養は、修行の最も大切な基本の一つなのです。三つの布施の実践とともに、瞑想による供養も毎日行なって、高い世界の魂との縁を強めましょう。

（九四年二月十三日　於・大阪支部）

真理勝者や、覚者や、あるいは向煩悩滅尽多学男女、あるいは真理を供養し続ける人は、その真理勝者や覚者、向煩悩滅尽多学男女、そして真理から見捨てられることはありません。この三宝が、あなた方を必ずや守護することでしょう。

（特別教学システム　第二課　質疑応答）

ところで祝福というものは、なぜ存在するのでしょうか。それは祝福を受けるだけの供養、あるいは帰依というものがこちら側にあるからにほかなりません。つまりすべての現象はキャッチボールなのです。一方的に与えられることはないのです。

密教的成就に至る七つの条件のうち、一番目の礼拝と七番目の回向は固定されていますが、供養・ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願は並行して行なわれるものであると尊師は説かれています。とはいえ、六つの極限の第一番目に「布施」がきていることからもわかるように、供養は修行を進めるためには欠くことのできない基本です。日々の礼拝・供養をしっかり行なってください。

今回は紙面の都合で礼拝と供養しかご紹介できませんでしたが、この七つのプロセスと礼拝、供養について説かれている尊師説法の掲載書籍を一覧にしましたので、教学と日々の実践に役立ててください。

次回は、「密教的成就に至る七つの条件②――ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願・回向」について学びましょう。

第二回　密教的成就に至る七つの条件②
――ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願

真理のエッセンスを一つずつ学んでいるこのコーナー。前回は、「密教的成就に至る七つの条件（タントラの七つのプロセス）」のうちの二つ、礼拝・供養について学びました。皆さんの日々の真理の実践に生かしていただけたでしょうか。

礼拝・供養・ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願・回向――この七つの修行は、わたしたちが成就するためにどれ一つとして欠くことのできない、基本的な修行ばかりです。しかも、これらすべてを完全に修めることができれば、それだけで成就に至ることができるという大切な修行法でもあります。

今回はザンゲ・賛嘆・懇願・祈願・回向について見ていきましょう。

3．ザンゲ
――心のけがれを取り除く

そして第三科だ、ね。第三科はザンゲであると。これは心のけがれをそのままにしていたらいけないわけだから、本当に心に悔いたものに対して、本当に心に引っかかっているものに対して供養する、ね、ザンゲする。そして、それをグルから、あるいは大師から取ってもらうと。「お願いしますよ」という気持ちでザンゲすると。これが第三科の修行になる。

（八八年十一月四日　富士山総本部道場）

●ザンゲとは

ザンゲとは自分自身のこれまでになしてきた行為・言葉・心の働きの中で、真理の法則に照らし合わせて振り返ってみたときに悪業であったことをすべて告白し、二度とその悪業をなさないことを誓うという行為です。

ザンゲをなすことにより、わたしたちの悪いカルマが解放され、悪業が浄化されます。また、未来における悪業を生じさせないという心の働きがつくられるために、わたしたちの心はどんどん透明になっていきます。それによって、高い世界へ至るための修行を進めるのに必要な、透明な心の状態を得ることができるのです。

ザンゲの瞑想、心を浄化する瞑想とは何かというと、これはわたしたちの心に生じている心の煩悩――貪り・嫌悪・無智。あるいは、口の煩悩――綺語・妄語・悪口・両舌といったようなもの。あるいは、今までなした身の行ない――殺生・偸盗・邪淫といったようなもの――、このようなものを、もし放っておくならば、それはちょうど、池の中にたくさんのゴミを入れて、放っておくようなものである。

（中略）

じゃあ、悪いことを消滅してしまうためには何があるんだといったら、どうだ、そこで出てくるのが、心を浄化するザンゲの瞑想ということになるわけだ。そして、このザンゲの瞑想をなすならば、徹底的に瞑想をなすならば、功徳の光、そしてその光が投影されるこの現象界では良いことだけが起きるようになる。いいね。そしてその人は、どんどんどんどんいろんな意味で幸福になってくる。まあ、君たちの考えている幸福という定義と、わたしの言っている幸福という定義は、かなりズレがあることを認識しなければならない。その幸福の定義のズレとは何かというと、欲求が一切起きない状態をわたしは幸福だと考えているから。まあ、それはいいとして、功徳の瞑想、あるいは功徳の実践、ザンゲの瞑想、心を浄化する瞑想、あるいはその心を浄化する実践、ザンゲの実践が完全になされたとき、合一する瞑想の

準備ができたと考えたらよろしい。

（八八年十一月十日　富士山総本部道場）

●ザンゲの対象

ザンゲには、自己の心の中で行なうザンゲと力のある成就者に対して行なうザンゲとの二種類がありますが、より大きな効果があるのは後者です。力のある成就者――グル――に対してザンゲを行なった場合は、より簡単なかたちで、より速やかに、わたしたちのカルマが浄化されるのです。なぜなら、グルにザンゲすることによってわたしたちに内在するカルマの解放が速やかに起こるだけでなく、グルとの間にカルマ交換が起こり、グルがわたしたちの悪業を背負ってくださるからです。

例えば、例を挙げるならば、ある人が力のある成就者にザンゲをしたとしましょう。その場合、その成就者の心の輝きを利用し、心の清らかさを利用して素早く反射されると。それによって、そのザンゲは、その人のなしたカルマを最もコンパクトに、そして最も楽なかたちで落とすという結果を得ます。

（九二年六月十三日　京都支部）

もともとキリスト教の特徴とは何かというと、これは〝罪をあがなう宗教〟という意味が存在する。つまり、例えばキリストを信じたならば、そのときからその人の罪は解放されると。これはちょうど、わたしがあなた方のザンゲを受けると、あなた方の罪がわたしに来、そしてあなた方のカルマが解放され、そこから救済されることを意味している。

（九四年三月十三日　大阪支部）

●ザンゲの具体的方法

では、具体的にはどのような方法でザンゲを行なえばいいのでしょうか。

しっかり修行時間を取って、ザンゲの瞑想をすることができるときには、十悪――殺生・偸盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪・瞋・痴――に照らし合わせて、今生生まれてから今までになした悪業一つ一つを思いつく限りザンゲします。グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション、小乗のツァンダリーなどの伝授を受けている人は、その中に含まれているザンゲの瞑想を行なうようにすればいいでしょう。ザンゲの詞章を常に唱え続けるだけでも心の状態に変化が訪れます。

また、一日を振り返って、その日の行為で十悪にあたるものをザンゲするだけでもよいでしょう。

さらには、何かザンゲに値する身・口・意の行為をなしてしまったときすぐに、あるいは、そのようなことをしそうになったときすぐにザンゲするようにすれば、わたしたちのなす悪業の量はどんどん少なくなり、心の浄化が進むはずです。

そして、ザンゲが完了すると、その悪業を思い出したとしても、心にひっかかりがなく、すがすがしい状態になるのです。

例えば、ザンゲの詞唱を唱えながら、一日の身・口・意における自己の欠陥についてチェックするという作業をしなさいと言ったんだよ。それはヴァジラヤーナのザンゲでもいいし、帰依マントラでもいいし、何でも構わない。大切なことは、その日その日の、一日一日の身・口・意の統御ができたかどうかをチェックするということだ。

（九〇年八月二日　富士山総本部道場）

現代の人たちにとってザンゲが効果を奏したか奏しなかったかについて、三期に分けて、そのポイントを説明しましょう。

まず第一期は、ザンゲの内容に対して心が動揺する段階。つまり現代人はたいへんクールな生活環境にありますから、いろいろな悪業をなしたとしても、その悪業に対して全く愚鈍で反応しない心が形成しています。したがって、ザンゲをしっかり行なうことにより、まず心が動揺する段階、これがやってくるということです。

第二番目には、つまり第二期の段階では、ザンゲを行なうことによって、その動揺が静まる段階。そして第三の、第三期では、ザンゲを行なうことによって、心がたいへん気持ちいい状態が訪れる段階、の三つに分けることができます。

したがってザンゲは、一度行なえばよいものではなく、例えばグルに対するザンゲはあくまでもきっかけであり、そのザンゲを何度も何度も行なうようにし、この第一期から第三期までの状態をしっかり観察、しっかり観察するようにしてください。それによって、あなたの心だけではなく環境が変わり、あなたの人生は一変するはずです。

（エウアンゲリオン・テス・バシレイアス「運の良くなるザンゲコーナー」二十回）

さあ、わたしたちの瞬間瞬間の身・口・意の行為を法則に照らし合わせて、毎日しっかりザンゲしましょう。そして、ザンゲによって起きるカルマの解放を喜び、心を浄化していきましょう。

ザンゲはわたしたちの過去の悪業を浄化する最高の方法です。

ところでわたしたちが、もし殺生のザンゲをなすならば、わたしたちの身体に痛みが出てきたりします。これは例えば、ヨーガや気功を行なっていると、体が熱くなって、そののち痛みが出てくるのとたいへん似ています。つまり、風の働きが強まり、それによって管の詰まりが刺激され、それによって痛みが出てくるのです。

したがって、ザンゲののちに起きるいろいろな現象は、自己のカルマの悪業の現象化、しかもそれは小さなかたちでの現象化だと考えるならば、わたしたちは、大いにザンゲを楽しみ、そして実践することができます。

（エウアンゲリオン・テス・バシレイアス「運の良くなるザンゲコーナー」十六回）

4．賛嘆

――グル、真理、自己の功徳を称賛する

そして、第四科の修行だ、ね。それは、グルに対して、あるいは真理に対して、徹底的に誉め称えることによって、ね、真理との縁をもっともっと深く、強くしようとする心の働きだ。そこで否定はない。そこには否定はない。すべてが肯定だ。例えば、大師に対して、例えば自分よりも先輩に対して、いろいろ嫌な点が目についたとしても、自分より優れた点を探すと。そうすると、必ず修行の進んでいる人は、優れた点をたくさん持っているわけだね。それに対し

て目を向け、賛嘆するんだ。これが第四のプロセスだ。そうすると、これは真理に対して縁を強めるだけではなくて、いいかな、心の成熟も当然、促そうと。それは四つの無量心の中の喜に当たるからね。

（八八年十一月四日　於・富士山総本部道場）

わたしたちの周りには多くの情報があります。書店や図書館へ行けば数え切れないほどの本が並んでおり、数々の思想や哲学、宗教が提供されています。しかし、それらの中に、四つの絶対的真理——苦・苦の生起・苦の滅尽・苦の滅尽に至る方法——を説き明かし、わたしたちを無常から解放し、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜に導くような法則があるでしょうか。

さらに、その真理の法則を体現し、わたしたちを絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜に導くことのできる魂が、世界五十二億の人々の中に、いったいどれほどいるでしょうか。

それほどまれな真理の法則とグルに巡り会い、真理の実践をすることのできるわたしたちは、なんと幸せなのでしょう。

一つの魂が人となること、真理勝者がこの世に現れること、真理の法則が説き明かされることがいかにまれなことであるかを、仏典では次のように表現しています。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、この大いなる大地が一つの水であり、そこで男が一つの穴の空間のあるくびきを中に置くと、すぐに、東の風は西にかき集め、西の風は東にかき集め、北の風は南にかき集め、南の風は北にかき集めるとしよう。そこで、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がる、その盲目の亀がいるとしよう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。実は同一に、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることがあるだろうか」と。

「尊師よ、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ず

つ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れるということ、これは思いもよらないことです」と。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、人の状態を得ること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転なさること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、真理勝者が説き明かされた法則と修行が世界に顕著になること、これは思いもよらないことである。

(『絶対の真理に関係づけられた経典(サッチャ・サンユッタ)』第五がけ品 より)

5. 懇願

そして、第五のプロセスは、懇願だ。これはグルに対して、最高の法をお願いしますよと。わたしのもとから去らないでくださいと。わたしのすべてを差し上げますからと。これはすべてと言ったのは、身・口・意、三つのすべてを差し上げるということだ。これが第五のプロセスだ。

(八八年十一月四日 於・富士山総本部道場)

(個人に法を伝授する)……機会があまりにも少ないと。なぜ少ないんだといったら、それは君たちが求めていないからであると。いいか、法というものは求めなければ得られないんだということを意識しなさい。そして、法を求めるためには、君たちがふだん欲している煩悩的なものをすべて供養すると。すべてグルに差し出すと。すべてシヴァ神に差し出すと。そういう心を持って法に対峙しなさい。そうすることによって、君たちは本当の意味で高い法を学ぶことができる。

(八九年六月・日 於・富士山総本部道場)

6. 祈願

そして次の六番目はね、もう少し大乗的になってきて、ね、自分たちをそれだけ真理に導いてくれるグルが涅槃をするということは、これはまだ成就していない涅槃していない魂にとって大変な損失になるから、だから涅槃をしな

このようなまれな機会を得ることができたのは、わたしたちに過去世から積み上げてきた多大な功徳があったからにほかなりません。

そこで、このような素晴らしい真理の法則とグル、そして真理に巡り会うことのできた自分の功徳を褒め称え、感謝するのが賛嘆の実践です。

この賛嘆の実践により、わたしたちはよりいっそう真理の法則やグルとの縁を深めることができ、また喜覚支の実践がわたしたちの修行を進めるスピードを増してくれるのです。

わたしたちの修行は、グルによる真理の法則や正しい修行法の伝授なくしては進みません。グルは修行の途上でわたしたちが困難にぶつかったとき、最も簡単にその困難を乗り越える道を示してくださったり、エンパワーメントによってわたしたちのカルマを引き受け、グルの持つ解脱に至るデータを与えてくださったりもします。

そのグルに対して、自分が最高の解脱・悟りを得るまでは決して自分の前から去らずに導き、加護し続けてくださること、真理の法則を説き続けてくださることを哀願するのが懇願の修行です。

わたしたちにこれまでに与えられている法則は、真理の法則のすべてではありません。わたしたちが不放逸に修行を行ない、求め続けなければ法は与えられないのです。

わたしたち弟子が真摯に法を求め、グルを求め続けるならば、必ずやグルはわたしたちに必要なときに必要な法則を与えてくださり、わたしたちを加護し最終地点まで導いてくださるでしょう。懇願の修行は、グルとの縁を強める修行でもあるのです。

いでくださいと、ね、グルは涅槃には入れるんでしょうけど、涅槃をしないでくださいと、そういう心を込めて祈願するわけだね。

（八八年十一月八日
於・富士山総本部道場）

ここまでの五つの修行——帰依・供養・ザンゲ・賛嘆・懇願——によってたとえわたしたち自身が解脱・悟りを得ることができたとしても、それは修行の本当の目的地ではありません。なぜなら、無数の魂が三界をさまよっているからです。それらすべての魂が絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界に入るまで、グルにこの世界にとどまっていただかなくてはなりません。

しかし、グルはいつでもマハー・ニルヴァーナに入ることができる魂です。「グルというものは弟子を欲してるわけではない。弟子がそこで、悟りたい、解脱したいと考えるからそこにグルはいるんだ」。——つまり、わたしたちの懇願なくしては、グルはこの現象界にとどまってはくださらないのです。

二千五百年前、サキャ神賢真理勝者が弟子のアーナンダの言葉によって大完全煩悩破壊を心に決められたという話は皆さんもご存じでしょう。

三たび、実に同様に、世尊は聖者アーナンダに呼びかけられた。「アーナンダよ、ヴェーサーリーは満足できる。ウデーナ神殿は満足できる。ゴータマカ神殿は満足できる。サッタンバカ神殿は満足できる。バフプッタ神殿は満足できる。サーランダダ神殿は満足できる。チャーパーラ神殿は満足できる。

アーナンダよ、四つの如意の基礎が修習され、真面目に行なわれ、進めることが行なわれ、骨子が行なわれ、経験され、綿密に検討され、よく着手されたどんな人も欲求するならば、カルパや、あるいはカルパの残りの期間生存することができる。

アーナンダよ、実に、真理勝者にとっては、四つの如意の基礎が修習され、真面目に行なわれ、進めることが行なわれ、骨子が行なわれ、経験され、綿密に検討され、よく着手された。アーナンダよ、かの真理勝者が欲求するならば、カルパや、あるいはカルパの残りの期間生存することができるのである」と。

このように実に同様に、聖者アーナンダは、世尊によって粗大な兆候がなされ、粗大な光明がなされていたにもかかわらず、洞察できず、世尊に懇願しなかった。「尊師よ、世尊は一カルパ生存なさってください。最上善逝は一カルパ生存なさってください。数多くの人々の祝福のために、数多くの人々の楽のために、世界に対する慈悲のために、愛欲神たちや人々の利益のために、祝福のために、楽のために」と。

それは破滅天に浸透された心のようであった。

(中略)

「アーナンダよ、だから、これはまさに君の罪深い行為である。これはまさに君の誤りである。君は、真理勝者によってこのように粗大な兆候がなされ、粗大な光明がなされていたにもかかわらず、洞察できず、真理勝者に懇願しなかった。

『尊師よ、世尊は一カルパ生存なさってください。最上善逝は一カルパ生存なさってください。数多くの人々の祝福のために、数多くの人々の楽のために、世界に対する慈悲のために、愛欲神たちや人々の利益のために、祝福のために、楽のために』と。

アーナンダよ、もし君が真理勝者に懇願するならば、二度だ

けはその言葉を真理勝者は辞退するが、それで三回目には同意するであろう。アーナンダよ、だから、これはまさに君の罪深い行為である。これはまさに君の誤りである。

（「大完全煩悩破壊経」より）

わたしたちは、すべての魂が偉大なる覚醒に至るまでグルがこの現象界にとどまってくださることを祈願し続けようではありませんか。

7．回向

そして、先程言った第七番目は封印だね。自分も今苦しんでいると。しかし、他の人よりは楽であると。真理の修行ができるだけ自分は幸福であると考えて、いいかな、いまだかつて真理に気づかない人に対して、三悪趣に落ちる人に対して、どうか真理に気づいてくださいと。そして、ね、修行してくださいよと。そして、自分の功徳そのものが、その人たちの修行を進める結果につながるようにと祈ると。これは、回向というのは、封印と同時に、愛、哀れみという言葉ともつながってくるね、当然。

（八八年十一月四日 於・富士山総本部道場）

わたしたちは真理の実践をすることにより、多くの功徳を積んでいます。功徳とは修行を進めるために必要不可欠なエネルギーであると同時に、わたしたちの持つさまざまな願望を成就させるエネルギーでもあります。この功徳がどのような形で実を結ぶかは、わたしたちの意識が向かう方向によって決まります。つまり、いくら修行をして功徳を積んでも、煩悩を満足させることに意識が向かっていたなら、功徳のエネルギーは煩悩を満たすことに使われてしまい、わたしたちの修行上のステージを向上させてはくれません。そこで必要になってくるのが回向です。

回向とは、修行によって得た心の平安や真理の実践によって積んだ功徳が、すべての魂を利するために使われることを思念することです。それによって、自分の積んだ小さな功徳は、他の魂を利するという、より大きな功徳になります。その功徳をまた衆生に還元すればさらに大きな功徳になり、わたしたちの積むことができる功徳の総量がどんどん大きくなります。これが結局は自己の修行を進

めてくれることになるということは言うまでもないでしょう。つまり、回向によってわたしたちの功徳は封印され、煩悩に流れることなくすべての衆生の真の幸福へ、ひいては自己の修行を進めることへと向けられるのです。

回向の詞章は各支店に掲げられています。タントラの七つのプロセスの修行だけでなく、日々の修行の最後には必ず回向を行なうようにしましょう。それによってわたしたちは自己の修行をより一層効果的に進めていくことができるのです。

いかがでしたか。これらの修行を日々行なうことの意義を、最後に尊師のお言葉でまとめておきましょう。

もう一度最後に言うよ。まず、帰依の修行、これが礼拝であると。次に自分を差し出す修行、これが供養であると。そしてザンゲ、これが浄化であると。賛嘆、これによって修行の勢いをつけると。ね。祈願、これによってグルとの縁を強くすると、ね。涅槃に入らないことを願い、これによって生き物たちの利益を保つと。そして回向によって自分の修行そのもの徳そのものに封印をし、ね、その徳があまねく一切に広がることを考えると。（中略）あなた方も、ね、日々意識して、この七つの課程というものをもう一度意識して、修行を今日からスタートするつもりで頑張んなさい。

（八八年十一月八日　於・富士山総本部道場）

今回も、ザンゲ・賛嘆・懇願・祈願・回向について説かれている尊師説法の掲載書籍を一覧にしてあります。一歩進んだ教学に、日々の実践に役立ててください。